

移住就農

新規参入

研修制度

きはら ひろき
木原 弘樹さん（総社市）



就農：2018年（就農当時36歳）
新規就農研修：2016年6月～2018年5月
就農パターン：移住就農（大阪府出身）
耕地面積：1ha（うち借地1ha）
経営面積：桃（8品種）1ha
経営参画者：本人、妻
（繁忙期は両親が子守を協力）

自然豊かなところで農業がしたいとの思いから、岡山へ移住。不安よりも『できることが増える』ことへの期待と、桃づくりの楽しさがある。

——就農のきっかけは？

前職のサラリーマンの時、安定感、将来性はあるものの、『与えられた課題をこなしていくだけの仕事を、はたして自分は定年まで続けていきたいのか』という疑念を持っていた。規模は小さくとも自営業のような自分で決められる仕事に憧れがあった。加えて、デスクワークよりも体を動かすことが好き（サッカーもずっと続けている）で、体を動かしながら働く仕事をしたいとの思いもあり、そこから農業にイメージが繋がった。また、前職で東京勤務だった時に東日本大震災があり、スーパーから食べ物がなくなり、その重要性を再認識し、食べ物を『作る側』の仕事をしてみたいとの思いに至った。

平成28（2016）年、「くだもの王国」岡山県へ移住。開放的な自然の中での栽培を志し、吉備路の五重塔を望む畑での桃栽培を選択した。

——岡山（総社市）を選んだ理由は？

最初に「晴れの国」というキャッチコピーに惹かれ、瀬戸内の温暖な気候も魅力的に映った。また、岡山県は災害が少ないと

いわれていること、大阪からも近いということから、岡山で農業をすることを選んだ。まず岡山南部を対象に、果樹に限らず他の野菜産地なども現地見学し、栽培品目・産地を絞っていった。田舎的な暮らしへの憧れはあったが、買物に車で1時間となると、これまでの暮らしとギャップが大きすぎる。岡山県の都市部である岡山、倉敷とも近く、電車や高速道路のインターがあり、空港も近く、利便性のよい（一方で、自然的風景、田舎的要素も備えており、ちょうどよい）総社市を選んだ。

吉備路もも出荷組合にはIターン、Uターンの若手就農者が多く、若手桃農家間での情報交換、勉強会が盛んにおこなわれており、自身の成長を促す環境が整っていたことも後押しした。

——「桃」を選んだ理由は？

岡山県では桃やぶどうの果樹が有名。大阪の新規就農募集説明会を訪問し、どちらかというつぶどうの思いで参加したけれども、総社という場所が気になって現地見学に参加した時、初めて桃畑をみた。対応してくれたのが板敷組合長（当時出荷副組合

長)。組合長も非農家 I ターンで就農された方。ぶどうに比べて桃畑は開放的で、のびのび外で仕事している感じがいいなと思った。また、年間労働時間の配分をみてもメリハリがあり、なにより板敷師匠の経歴や人柄に惹かれ、ここで希望作物が一気に桃に変わった。

——就農で苦労した点と解決方法は？

【農地】

自分を研修で受け入れてくれた公社が、桃若木の管理を研修メニューとして用意してくれていた（若木 60a）。また、研修修了を控えていた時、タイミングよく「もう少し面積をやってみないか（成木 40a）」と声掛けしてくれた方がおられ、就農 1 年目から収益を上げることができる園地も準備できた。

【資金（経営・生活）】

皆さん共通だと思うが、研修期間の 2 年間に加えて、就農して当面の間は安定した収入が見込めないため、それでも生活できるくらいは自己資金を準備しておく必要があると思う。自分の場合は就農 1 年目から成園が準備でき、桃単価が高い年だったので、資金管理の面で有利に過ごせて幸運だったと思う（2 年目以降は単価安で苦しんだけれど）。

【栽培技術】

2 年間の研修の中で、師匠の板敷組合長の手厚い指導を受け習得した。よい桃を、より多く生産することを目指し、日当たりや樹を植える間隔、袋掛け、剪定技術を組合で研究したり、勉強会を開催したりと、自信を持てる果実生産を心がけている。また、全国的にも珍しい冬の白桃「冬桃がたり」（収穫：11 月中旬～下旬）に取り組んでいる。

【住宅】

当地域にはアパートはあるものの、自分が希望する作業小屋が併設された農家住宅はなかなか見つからなかった。大阪からの移住なので土地勘がなく、ほ場から近い一戸建ての賃貸をネットで検索し、以後 6 年くらい住んだ。現在は、組合の先輩の方が紹介してくれた土地に住宅を新築し住んでいる。

【機械・施設の準備】

防除用動力噴霧機（動噴）は先輩農家からたまたま譲ってもらうことができ、また補助金を活用することで乗用草刈機が導入できた。できる限り自分の体を動かしながら管理していきたいという思いもあるので、乗用大型防除機のスピードスプレー等は、今のところ導入予定がない。なお植え替え時に必要な（木の根を抜いたりする）ユンボなどはリースで対応している。

——家族はすぐに理解してくれましたか？

就農に際して、安定したサラリーマンからの転身には、当初はなかなか理解してもらえなかったが「どうしてもやりたい」という理由と熱意を何度も説明して、最後は了解を得た。妻は最初から理解をしてくれていた。——感謝。

——計画と現実のギャップはあった？

新規就農者は畑を買うのではなく貸借して栽培することがほとんど。私が借りている畑のなかで貸借期間が過ぎたら返却する畑もなかにはあるので、それに備えた経営戦略を考慮する必要がある。

——地域への適応、順応に苦労した点、気を付けた点は？

地域行事等、積極的に参加している。特に苦労する点はなく、経過している。

——今後やりたいことは？

もっとよい桃をもっと大規模に出荷できる桃農家になりたい。岡山といえば桃、ぶどうが有名だが、全国に吉備路もも出荷組合の桃をもっと広く知ってもらいたい。組合も高齢化が進んできているが、今後維持発展のために尽力したい。

——経営目標は？

80歳くらいまで脚立にのぼり、動噴で防除し、それで経営できる規模を続けていきたい。目標は毎年平準化しながら5～6万袋くらい桃に袋かけできるようにしたい。周りからは「木原君、まだ元気じゃなあ」と驚いてもらえている姿を目指したい（…実は最近、乗用草刈機が手放せない(汗)）

——農業のやりがいは？

自分がつくったものが形になることへの喜びが大きい。1年間の仕事の集大成が収穫なので、順調に作業をこなし、収穫を迎えるときはうれしい。

会社へ通っていた日々から桃畑に通う日々。桃の収穫期には、朝5時から畑にでて、果実袋の中の桃をひとつひとつ覗き込んで果実を確認しながら丁寧に収穫する。午後に選果場へ持ち込み、選果作業をゆだねる。自分で働き方を決めることができ、子どもと触れ合う時間も増え、充実している。不安よりもできることが増えることへの期待が優り、桃づくりを楽しんでいる。

——今の産地の魅力は？

技術的なフォローも手厚く、年配の方ももちろんだが、同じ目標をもった若い仲間つながりもあり、好き。また、吉備路もも出荷組合は、インスタグラムやフェイスブックに桃品種の紹介や収穫の様子がわかるコンテンツを投稿、更新している。自分

たち夫婦や、組合の「女子部」もSNSで産地の魅力の情報発信に努めている。

——後進へのアドバイスは？

自分たちは、岡山に住みたいなと思ってから2～3年かかった。リサーチが大事、そしてフィーリングが大事だと思う。

自分が決心するまでのオリエンテーション、産地訪問等ではいまひとつ踏ん切りがつかなかったが、自分の場合、板敷さんというキーパーソンと出会って自分の就農の姿がイメージでき「どうしよう」という迷いから脱却できた。自分が探っているものに出会うため、自分の背中を最終的に押ししてくれる何かを求めて、いろいろ訪ねることが必要だと思う。

——就農前の自分へのアドバイスは？

納得するまで、とことん詰めましょう！！

～こぼれ話～

木原夫妻はそれぞれ大阪、千葉の出身で、『桃といえば赤色』だった。自分たちで白い桃を栽培するようになり、家族や友人がまず、見た目が「きれい！」そして「おいしい！」と喜んでくれることがうれしい！！

——私の一文字

「喜」。

桃をつくることに喜びを感じます。桃を通じた日常生活にも、喜びを感じます。

